笠井の歴史と榎吉家の系譜

ごあいさつ

柴刈り縄なひ草鞋（わらぢ）をつくり、
親の手を助（す）け弟（おとと）を世話し、
兄弟仲よく孝行つくす、
手本は二宮金次郎。

『尋常小学唱歌（二）』明治四十四年六月

かつての日本には、こうした唱歌が多くありました。

二宮金次郎は天明七年（一七八七）に神奈川県小田原市に生まれた農政家です。

十四歳で父親を、十六歳で母親を亡くして、一家が離散する中で、一生懸命に勉学に励み、青年期には疲弊した農民に働く喜びを教え、多くの村を復興させました。この農村復興・財政再建策のことを報徳仕法と呼ぶようになりました。そして多くの弟子たちによって報徳仕法が展開され、金次郎は日本人の心の拠り所として讃えられました。

この報徳仕法が遠州地方に広まったのは江戸後期からです。そして神奈川県秦野市の安居院庄七の指導により、下石田報徳社など各村で報徳社が設立され、明治十七年（一八八四）には掛川の岡田佐平治を中心に「遠江報徳社」としてまとめられ、明治四十四年（一九一一）に全国にあった九〇〇社は、「大日本報徳社」となりました。訓導十名は社長代行をして報徳の普及に活動して行きました。

笠井報徳社は明治四十年（一九〇七）に訓導大木久市郎（松島十湖の高弟）により設立され、大いに発展しました。しかし、終戦後の昭和二十一年（一九四六）、新しく全国に農業協同組合が結成されたことにより、三十九年間続いた笠井報徳社は解散することになりました。

戦後の復興から平成へと時代は大きく変わり、七十余年の歳月が過ぎて行きました。

骨身を惜（をし）まず仕事をはげみ、
夜なべ済まして手習（てならひ）読書、
せはしい中にも撓（たゆ）まず学ぶ、
手本は二宮金次郎。

訓導大木久市郎の設立から実に一一一年の平成三十年（二〇一八）十一月三日、有志が集まり笠井報徳社を復活しました。常会と称する例会は毎月第一金曜日と定め、旧笠井郵便局に集まり、笠井の旧家を調査しようということとなりました。その第一弾が「榎吉家」でした。

次頁からの文章は、榎吉清光氏が独自に調査をしたものです。資料が少なく解明出来ない所もあります。皆様には「笠井の歴史と榎吉家の系譜」をご一読され、ここに書かれていない事柄をご教示していただければ幸甚に思います。

家業大事に費（つひえ）をはぶき、
少しの物をも粗末にせずに、
遂には身を立て人をもすくふ、
手本は二宮金次郎。

笠井報徳社　理事長　山下智之

はじめに

笠井の歴史と榎吉家

戦前の笠井町には、笠井報徳社（二宮尊徳の教えを学ぶ会）があり、令和元年に有志が集まり、改めて「笠井報徳社」を立ち上げようということになりました。

その活動の手始めに旧家を調べようと、榎吉家、山下家が上がりました。これから示す榎吉家の系図については、身内の関心のある一部の者が、部分的に口伝や系図に見られるような諸説に関心を持っていたものです。

しかし系図に見られるような「一家没落」や「一家三人討死」のように、代々、苦節の中で、失うものも多くあり、また残された文書、資料も少ないために、諸説を体系的に論ずることが出来ませんでした。

その中で一番の疑問点は清和天皇の存在でした。それが今回の調査の中で「三代実録」の中に、長上郡に補任の貞純親王を支えるために、清和天皇が行った三点（一・頭陀寺を定額寺とする。二・長上郡の田地を貞観寺に施入する。三・長上郡の空閑地を貞観寺に施入する。）が明らかになりました。これによって、榎吉家の系図の信憑性が裏付けられたことが何よりの成果であります。

榎吉家の概要

〔所在〕

笠井街道を浜松方面から入ると、笠井の家並みの左側に旧笠井郵便局の局舎が残されています。長い間、榎吉家（新家）が所有していましたが、老朽化のため、解体を余儀なくされました。その時、池田大（ひろし）氏（おびや社長）が「『静岡県のすごい産業遺産３』に掲載された笠井のシンボルの旧郵便局舎」をなんとかして残そうと考えられ、父親の充義氏（おびや会長）に相談すると、「局長さんにお世話になったから」と大変な改築工事に対して、私財を投じて保存していただきました。

笠井の近現代史の研究家で、篤志家の充義氏の考えは涅槃表静（人は何らかの役目を持って生かされている）にあり、息子の大氏の「旧郵便局の再開発」という壮大な事業を後押しされました。

榎吉家（本家）は、この局舎の南側に位置し、さらにその南側には本家が屋敷の一部を提供して、笠井街道と西浦通りをつなげた「さつき通り」があります。また「さつき通り」から、笠井街道を浜松方面へ少し進んだ、通称、警察通りと笠井街道との接点に榎吉家（新家）が残されています。

〔屋敷・畑跡〕

榎吉家の口伝では将監名家だと言われていて、戦後まで、上段の間の付いた矢場（弓道場）がありました。そして中の門を挟んで広場があり、その西側に畑がありました。中庭に数寄屋風の庭があり、軒瓦に菊の御紋がありましたが、終戦後に「ＧＨＱ（連合国軍最高司令部）が来る！」とのことで、慌ててセメントで固めたことが後年発見され、保存されています。

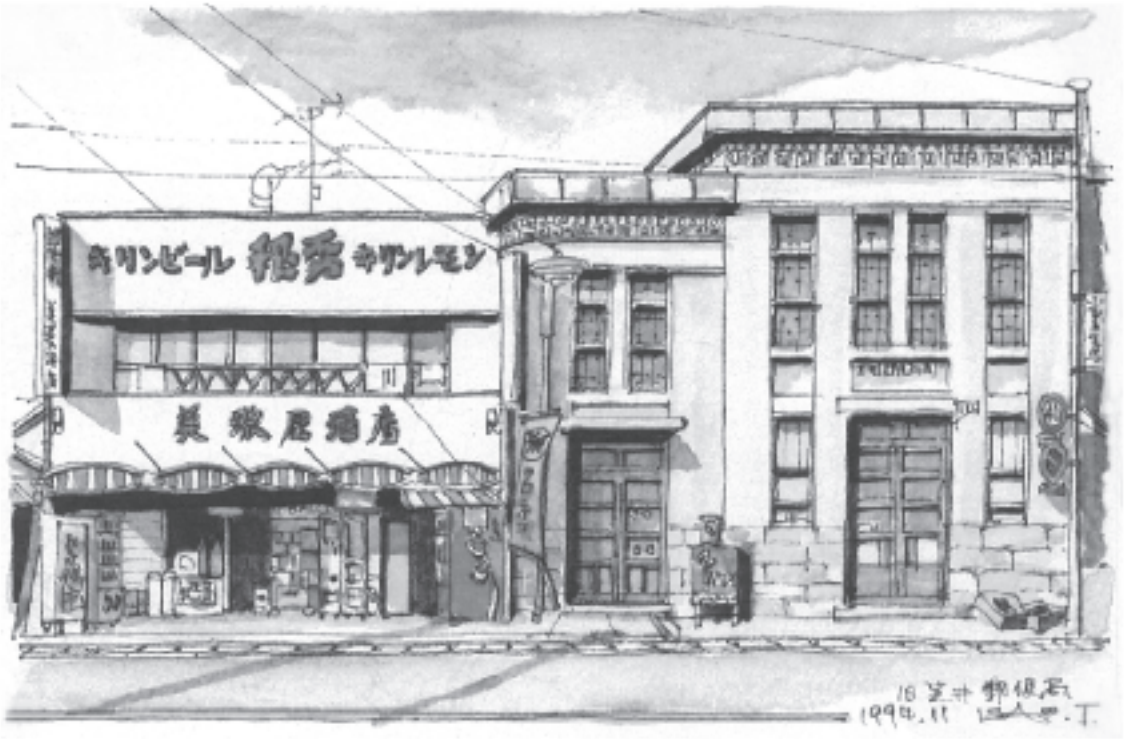
屋敷・畑跡には、現在、榎吉家の子孫五戸が住んでおり、笠井町役場跡が「仲町公会堂」として残り、旧笠井郵便局が池田家により保存され、法永寺へ寄進した土地が点在しています。

〔系図〕

・系図は将監名家の系図と思われるので、傍流の記録はありません。

・近現代については生没・法名等確認できますが、平安から中世は不詳のため、全て生没、法名は除いて、系図の官位だけ入れました。

・笠井の歴史について、基本的には、『わが町文化誌 笠井』（浜松市立笠井公民館編）を参考にし、活躍した人物については、笠井報徳社の面々が提案検討された人物を入れました。なお、人名の敬称は省略させていただきました。



美濃屋酒店と旧笠井郵便局
（平成６年 高林功画）

第35代 榎吉太八（1852～1914年）

榎吉家第三十五代 榎吉太八は、明治六年から二十四年までの十九年間、笠井村副戸長、笠井村戸長、笠井村村長、笠井町町長と明治の創成期を笠井の為に尽力した。「西の太八に東の十湖」と尊敬された。

室町後期。第二十二代の時、姓を榎吉将監と改め、苗字帯刀を許され、笠井を中心とした遠州北部を統括する油の製造と販売の特権を与えられた商家となり、屋号を「美濃屋」とした。明治六年「郵便取扱所」に指定され、美濃屋は郵便業務と油屋と地主を兼ねた店となった。

太八の弟 逸郎は明治五年に天神村 中村酒造の中村五郎七家へ養子となった。逸郎の長男 中村陸平は浜松市長になった（昭和三年から六年まで）。

美濃屋は陽平、太八、政治、礼三、竹治、平之助と引き継がれた。太八の孫 竹治は天神蔵で商人の修行をして、昭和九年に美濃屋酒店を開店した。

郵便業務は陽平、太八、純、良三と引き継がれた。昭和八年、三代目局長の榎吉純は美濃屋の隣に洋風局舎を建設して、独立した。

美濃屋には、「太閤御判真蹟」江戸後期の書画鑑定家・安西雲煙諦観が保存されている。これは「一五八二年」頃の文書である。

榎吉という名字については、斎藤道三の字（あざな）「榎の長者」の（榎）と、「秀吉」の（吉）を戴いたものだとの榎吉家代々の口伝がある。また開基の泰龍山笠井院法永寺には、「榎の古木」が祀られていた。

笠井の歴史と榎吉家の系譜

時代	西暦	年号	笠井の歴史年表と榎吉家の系図の流れ	主な日本の動き
旧石器	一万年～二万年前		天竜川の扇状地遠州平野が出来、かさいの土地が出来始める。	浜北人 磐田原台地の遺跡群
縄文	紀元前二〇〇〇年頃			三ヶ日人 蜆塚遺跡
弥生	二〇〇年頃		豊西・恒武地区で人々が生活を始める。	伊場・芝本遺跡
古墳	四世紀		渡来人によって治水の技術等が伝わる。	古墳時代遺跡
	六世紀		蛭子森古墳が今の豊町羽鳥に造られる。	
	五五〇年頃			
飛鳥	六四五	文化 二	遠淡海国が創置される。	※1 大化改新（乙巳の変）
	七〇三	大宝 三	浜松で最も古い頭陀寺が建立される。	
	七〇八	和銅 一	出雲国から勧請して、服織神社が今の豊町羽鳥に創建される。	

※1 蘇我氏打倒に始まる一連の政治改革。唐の律令制を基に天皇中心の中央集権国家建設を目標したとされる。中大兄皇子、中臣鎌足や孝徳天皇などが中心となる。

奈　良

七一〇　和銅　三
遠淡海国を遠江国と改める。

七一三　同　六
藤原京（六九四～七一〇）を経て平城京遷都

七四三　天平一五
墾田永年私財法
※2 墾田の永久私有を認めた法。身分によって所有面積に限度を設けた。

七六一　天平宝字五
古代天竜川の麁玉川が決壊、延べ三十万余人を動員して堤防を復旧する。後に「天宝堤」と称した。

七九四　延暦一三
長岡京（七八四～七九四）を経て平安京遷都

八〇六　大同　一
木彫りの聖観世音が発見されたと云う伝説あり（後の笠井観音）。

平　安

八五二　仁寿　二
藤原良房が惟仁親王（後の清和天皇）のために嘉祥寺西院を京都・伏見に建立する。後に貞観寺と改められる。

八六三　貞観　五
清和天皇が、頭陀寺（長上郡最古の寺）を定額寺に指定する。※3

八六四　同　六
清和天皇が、長上郡の田地 百六十四町を貞観寺へ施入する。※4

八六五　同　七
清和天皇が、長上郡の空閑地 百六十町を貞観寺へ施入する。※5

〔以上三点、『日本三代實録』巻第七、第八、第十一〕

※3 頭陀寺略史には「貞観五年（八六三年）清和天皇 当寺を定額寺（国家に一定数を限った特別な寺）とした。」とある。また、上記のように二年にわたり、田畑と空閑地を貞観寺（清和天皇の寺）に施入などして、第六子 貞純親王 四品号 桃園親王の補任の準備をしたと考えられる。

平　　安

九二七　延長　五

一〇二五　万寿　二

榎吉家の系図は、この清和天皇から始まる。

第五十六代 **清和天皇** 嘉祥三生　元慶四没

文徳天皇の第四皇子　母は藤原良房の娘

天安二年（八五八年）に九歳で即位、二十六歳で退位

※6 摂政・関白　藤原良房・藤原基経

『延喜式神名帳』に、「長上郡・服織神社」が記載される。

第一代

清和天皇
第六子　**貞純親王**　四品号 桃園親王

第二代

一男　**經基親王**　正四位 上總介　鎮守府将軍
始賜源姓

若倭神社が若林（現笠井春日神社付近）に再建される。
〔春日神社縁起〕

第三代

長男　**滿仲**　正四位下　摂津守　鎮守府将軍
号多田新發右馬頭

※4
一町＝3000坪＝（約100m）四方
百六十四町＝（約1.27km）四方

※5
日本三代實録
文徳天皇の後を受けて、清和・陽成・光孝三天皇の時代約三〇年のことを記した史書。全五十巻。

※6
摂関政治
一〇～一一世紀 藤原氏が天皇の外戚として、天皇を支えて政治を行った。この藤原良房の時期をのちの摂関政治確立期と区別して、前期摂関政治の時代ということもある。

平安

榎吉家の系図が『日本三代實録』で照合されたので、以下系図通りに述べる。

第七代 義国が勅勘を受けるまでは在京(都に住んでいた)と思われる。

一〇五一　永承　六
一〇八三　永保　三
一一五六　保元　一
一一五九　平治　一
一一八〇　治承　四
(一一七七～一一八一)
一一八一　養和　一

第四代

四男 **頼信** 河内守

第五代

嫡子 **頼義** 従四位下 伊豫守号 鎮守府将軍

第六代

長男 **義家** 正四位下 陸奥守 八幡太郎 号 鎮守府将軍

第七代

三男 **義國** 従五位上 式部大輔

一一五〇年・久安六年 義国と内大臣藤原実能との争いによる勅勘により下野国足利に隠居する。その後、上野国新田郡(現群馬県太田市)に住む。

法然上人の弟子西伝法師が西伝寺(現浜松・西伝寺町)を創建する(笠井の定明寺と法永寺は西伝寺の末寺)。

羽鳥庄(現豊西地区)が、京都・新熊野社領として寄進される。

第八代【新田へ改姓】

長子 **義重** 下野國足利住人 新田太郎 大炊之助 (新田祖) ※8・9

※7
この二つの役は、陸奥の土豪安倍頼時(浮囚―蝦夷の帰順・同化した者の長)が藤原経清らと国司に反抗、朝廷の命で、源頼義・義家が清原氏の助けを受けて前後十二年の役で平定、源氏の東国における勢力確立の端緒となる。

※7
前九年の役
後三年の役
保元の乱
平治の乱
以仁王が平氏追討の令旨を発する
源頼朝挙兵、木曽義仲挙兵

※8
系図の流れ
・第二代 源氏(祖)
・第八代 新田(祖)
のように系図は祖によってつながりを広げていく。
源義国 ┬ 義重(新田祖)
　　 └ 義康(足利祖)
のように流れる。

平安

第八代「下野の国 足利の住人」、第十五代「一家没落之時 上州ニ住ス」について調査した。

堀口については系図上の問題はないが、新田についてはつながりや状況は理解できるが系図上の確証はもてない。

第九代

三男 **義兼** 新田九郎

第十代

次男 **義房** 新田

第十一代

嫡男 **政義** 新田

曽祖父以来、鎌倉幕府より冷遇を受け、寛元二年に無断出家により没収。一族関係が複雑になり堀口へ。

※9 新田荘は、義重によって開発され、領家は藤原忠雅であるので、平氏政権との関係が想定される。このようなことがあってか頼朝の挙兵には加わらなかった。このため頼朝の勘気を蒙り以後冷遇された。

鎌倉

一一九二 建久 三

一三二四 正中 一

一三三三 元弘 三
正慶 二

第十二代【堀口へ改姓】

三男 **家貞** 堀口祖

第十三代

嫡子 **貞義** 堀口

※10 「碧王山 笠井院 法永寺」が臨済宗の僧覚源和尚により開創される。〔寺誌〕

頼朝征夷大将軍となる

鎌倉幕府滅亡

※10 遠江国風土記伝によれば、長上郡の郷名に「碧海」(安乎宇美)とあり、笠井郷は、碧海郷の中なり。今においても渕沼ありとある。また、「碧海池」笠井にあり、ともあることから、法永寺が「碧王山 笠井院」となったと考えられる。

南　北　朝 ※13

一三三四　建武一

足利尊氏が、中泉府八幡宮領に羽鳥庄内貴平郷の地頭職を寄付する。初代貴平内藤家の祖。

一三三六　延元一　建武三

一三三八　暦応一　延元三

第十四代

長子 **貞満** 堀口美濃守

新田義貞に従い各地を転戦功あり。
建武新政時美濃守となる。
鎌倉攻めには遠州天野とも共に戦っている。
越前・美濃・徳山を扶植※12することに腐心。
越前に没したともいう。

一三三九　暦応二　延元四

高師泰の軍により、南朝方についた大平城（浜北）が落城。

一三四〇　暦応三　興国一

高師泰兄弟が南朝方の城砦を次々に落し、次の年には浜松方面へも侵攻する。〔大福寺文書〕

第十五代

末男 **貞信** 一家没落之時
當歳ニテ服氏家 上州ニ住ス

※11 建武新政

足利尊氏、征夷大将軍となる

※11 後醍醐天皇が自ら政治を行う。

※12 扶植
自分の勢力・考えを人々の間に広げる。倒幕の仲間を増やすために、各地に出向いてはたらきかけをする。

※13 南北朝時代
一三三六年足利尊氏が光明天皇を擁立し、後醍醐天皇が吉野に移って南北朝が分立し、両朝は、諸国の支持を受けて、五十七年間抗争をした。

南北朝	室町
第十五代に、一家没落とあるから、荒々しさで有名な高師泰兄弟に完膚なきまでに攻められ、堀口の本拠地である上州に身を寄せたのではないか。	一三九二　元中九 明徳三 一四五四　享徳三
第十六代 嫡子 **義信** 堀口助六 **第十七代** 嫡子 **貞重** 堀口助十郎 **第十八代** 嫡子 **貞方** 堀口助左右門	笠井庄（室町幕府領）市野庄（貞観寺領） 笠井庄は、諸国御料所方支証目録〔内閣文書載〕によると、越前国葺郷に関する判物に「遠州笠井荘」がみえるという。〔大塚克美編『浜松の歴史』〕 羽鳥庄貴平村の次郎太夫朝重が、岩水寺の伽藍（がらん）を造る。〔遠江国風土記伝〕 **第十九代** 二男 **重房** 堀口助八郎 **第二十代** 嫡子 **重持** 堀口助左衛門尉
	南北朝合一[※14] ※14 南北朝の合体 足利義満の仲介で、南朝方の後亀山天皇の京都帰還が実現、北朝方の後小松天皇への神器譲渡により半世紀に及ぶ南北朝の対立が一三九二年に終った。

室　　町

一四五八	長禄　二	「無量山 貞明寺」が笠井に開創される。開山 円誉春山和尚。〔寺記〕
一四六七	応仁　一	
一四七七	文明　九	
一四八二	同　一四	笠井春日神社が室町将軍 足利義尚により創建されたと伝えられる。〔神社記〕
一四九八	明応　七	東海道沖明応大地震により、浜名湖が崩れて海に通じる。
一四九九	同　八	今川氏親が中泉府八幡宮領の羽鳥庄 貴平郷 地頭職を神主に還付する。
一五一三	永正一〇	今川氏親が一万の兵を率いて遠江を侵攻、楞厳寺（市野町）に本陣を置く。
一五三〇	享禄　三	六月二十二日に佐藤勘十郎が実相院へ熊野檀那職を売った中に「遠江国かさいの源左衛門子孫一門」が含まれていた。佐藤勘十郎『熊野 檀那場配分注文写』には、山城分として「かさい一円」が見える。〔静岡県の地名〕
一五三二	天文　一	信州より高井太郎左衛門、農民となり笠井新田を開拓する。信州より権太夫夫妻と子供の権蔵が、ごんじょ山の南を開拓する。

第二十一代

三男 **宗貞** 堀口助三郎

※15 応仁の乱はじまる

応仁の乱終結

※15 応仁・文明の乱
将軍継嗣争いと畠山・斯波家の家督相続争いに細川勝元と山名持豊が介入して起った十一年にわたる大乱。荘園制の解体も進んで戦国時代となる。

※16 今川氏は足利氏の支援で駿河守護となる。戦国時代に今川義元は駿河・遠江・三河を領国化し、東海の雄となったが信長に討れ衰えた。

一五四〇　同　九　今川義元が妙光寺の恒武郷内寺領を安堵する。

一五四一　同一〇　三河の石巻神社を祖とする大木一族が、新田地区を開拓する。

一五四九　同一八　※16 今川義元が笠井春日神社の社殿を造営し、社領を寄進ありしという。〔神社記〕

一五六〇　永禄三　春日神社には、当社の森林に牛馬を放つことを禁じた足利義尚の「禁制写」があり、神社とその周辺を若林として、神社両側の(現在の鈴木)両家が美濃屋の屋敷管理を含めて守ってきた。

一五六一　同　四　今川氏真が妙光寺領を安堵する。〔妙光寺文書〕

一五六八　同一一　徳川家康が曳馬城(引馬城)に入場する。

第二十二代

次男　**貞太**　濱松城主 井伊豊前守(ぶぜんのかみ)内榎吉将監 ※17 養子 ※18 参劔進發(さんしゅうしんぱつ) 父子三人共 討死　宗兵衛尉

第二十三代【榎吉へ改姓】

次男　**義之**　榎吉左次右衛門尉(榎吉祖)　三歳ニテ当郷服氏家ニ

キリスト教の伝来

桶狭間の戦い

※17 第二十二代・父子三人共討死の時、浜松城主(当時は引馬城)井伊豊前守に仕え、勲功ありとして、姓を榎吉将監と改め、苗字帯刀を許され、商家となり、笠井を中心とする遠州北部を統轄する。油等を一手に取り扱う「美濃屋」の屋号の店を開いた。〔山口県 浅海家系譜〕

※18 「参劔(さんしゅう)」…三州(三河国)三河へ進発(出陣)して、父子三人とも討ち死に。

室町	一五七〇	元亀 一
		「嶺照山 法光院」が笠井新田に開創される。〔寺記〕
	一五七二	同 三
		貞明寺が「無量山宝瑞院 定明寺」と改める。〔寺記〕
	一五七三	天正 一
		徳川家康が本拠地を曳馬城へ移し、浜松城と改名する。
	一五七五	同 三
		三方原の合戦
		室町幕府滅亡
		長篠の合戦
安土桃山	一五七七	同 五
		若林に大明神（笠井春日神社）が建立される。〔棟札〕
		法永寺が山号を改め、「泰龍山 笠井院 法永寺」として浄土宗に改宗する。〔寺記〕
	一五八〇	同 八
		「教福寺」が笠井地区に開創される。
	一五八二	同 一〇
		徳川家康、三遠駿を支配
		六月二日 本能寺の変
	一五九〇	同 一八
		豊臣秀吉、全国統一
		徳川家康、関八州へ移る
	一五九二	同 二〇
		定明寺で本堂火災、檀家の寄付金で再建される。〔寺記〕
	一五九六	慶長 一
		「白龍山 現成寺（現在の龍雲山 源長院）」が開創される。
	一五九七	同 二
		笠井新田春日神社が創建される。
		定明寺で再び本堂火災、池田庄三郎【⬇49ページ】が多額の寄付金を出し、再建される。〔寺記〕
	一六〇〇	同 五
		徳川家康、関ヶ原で勝利[※19]

江　戸

一六〇五	同一〇		二元政治、二代将軍秀忠
一六一四	同一九	※19 関ヶ原の戦い 豊臣秀吉は、死後、息子秀頼を五大老が補佐する政権を願っていた。しかし、家康が力を蓄えてきたため、豊臣政権の前進を憂えた五奉行筆頭の石田三成は、家康が会津の上杉景勝討伐に苦慮しているのを好機ととらえ、毛利輝元を総大将に擁して「内府（家康）ちがいの条々」という十三ヶ条の弾劾状を諸大名に送り、秀頼への忠節のため三成に尽くすよう求めます。この西軍と家康の東軍が戦い、東軍が勝利し、家康は実質的な覇権を確立した。	豊臣と大坂冬の陣
一六一五	同二〇		豊臣滅亡
一六一六	元和　二		徳川家康（七十五歳）逝去
一六二二	同　八	「浄土宗 安国山 養円寺」が笠井に開創される。〔寺記〕	
一六二三	同　九		三代将軍 徳川家光
一六三二	寛永　九		徳川秀忠（五十四歳）逝去
一六三四	同一一	法永寺で毎月十日に金毘羅（こんぴら）さま縁日（えんにちごんしゅ）厳修祈願（きがん）が始まる。〔寺記〕	
一六三九	同一六	大明神宮（笠井春日神社）が造営される。〔棟札〕	
一六四八	慶安　一	浜松城主太田備中守資宗（すけむね）が、笠井の市（いち）へ塩町と肴町（さかなまち）の出張販売を許可する。二俣や森町、金指、掛川と遠州の商人が特産品を持ち寄り、界隈随一の市に発展する。（定明寺辺りを元市場と呼んでいた。）	

第二十四代

嫡子 **宜満**　榎吉宗兵衛尉

一六五一	慶安　四	徳川家光（四十七歳）逝去
一六五二	承応　一	
一六五三	同　二	十一月廿二日「山下佐二兵衛じがひ（自害）し果て候」。〔高林家文書〕
一六七七	延宝　五	屋号「油屋」の池田庄三郎が、笠井検地帳を代筆する。
一六八三	天和　三	笠井村 家数八九、うち役家六六。〔岡部家文書〕
		羽鳥村の松島忠兵衛常茂が、源長院に本堂を寄進する。
		第二十五代 嫡子 **貞治** 榎吉五左衛門尉
一六九七	元禄一〇	笠井上町 春日神社が再建される。
		第二十六代 嫡子 **貞政** 榎吉左次右衛門尉
		第二十七代 二男 **政太** 竹内左次右衛門尉
一七〇二	同一五	浜松城主に松平伯耆守資俊
一七〇七	宝永　四	赤穂浪士討入り 富士山宝永噴火
		福田港が築かれ、見付や二俣などの特産品輸送で繁栄する。 掛塚港では廻船問屋（かいせんどんや）が天竜木材と藩米の輸送を独占して繁栄する。

一七一三	正徳　三	豊町下に「御嶽神社」が創建される。
一七一九	享保　四	豊雷神社が再建される。 笠井村 家数一一二軒（内七六軒本百姓、三十六軒水呑み）。 〔国領組諸色覚帳〕
一七五二	宝暦　二	浜松藩が遠州大念仏禁止令を出す。
		第二十八代 嫡子 **宜太** 榎吉喜平治 **第二十九代** 嫡子 **満清** 榎吉惣五郎
一七七〇	明和　七	五月頃、全国的に大飢饉となり、遠州地方は特に甚だしかった。
一七八二	天明　二	天明の飢饉（～一七八七）
一七八七	同　七	正月二十八日 夜四ッ半（午後十一時）頃、笠井村の庄屋佐次兵衛の近所より出火。夜明けまで焼け、笠井村は北より南まで残らず焼失する。
一七九九	寛政一一	小栗廣伴【⬇49ページ】や池田庄三郎勝彦は、内山真龍【⬇49ページ】と深い親交あり。 内山真龍『遠江国風土記伝』完成

江戸

一八〇四	享和	四	正月、笠井中組の講が組内に秋葉灯篭を建てる。
一八〇八	文化	五	笠井中組・下組が焼失する。〔川島家文書〕
			第三十代
			二男 **茂啓** 榎吉佐治右衛門 嶌田勘兵衛ヨリ養子
			第三十一代
			嫡子 **三秀** 榎吉佐治右衛門
一八一四	同	一一	小栗松靄【⬇49ページ】が生まれる。
一八一六	同	一三	酔春亭左光（内藤彦端【⬇50ページ】）の『遠津安布美句集』が版行される。
一八一七	同	一四	
一八一九	文政	二	笠井下組が焼失する。〔川島家文書〕
一八二六	同	九	村明細〔榎吉家文書〕によると、家数一五五（うち水呑二七）・人数六五三（うち僧二山伏二）馬五。特産品として笠井縞（河西縞）があり。
一八三四	天保	五	五月、笠井下組が町の南端に秋葉灯篭を建立する。

浜松城主に水野越前守忠邦

江　　戸

一八三九	同一〇	**榎吉勘三郎が「子育て地蔵尊」を建立する。定明寺の過去帳に、天保八年 四十一人死亡、天保十年 三十七人(内子供十四人)死亡、天保十一年 四十五人死亡の記事あり。**	
		第三十二代	
		二男 **重廣** 榎吉勘三郎	
一八四〇	同一一	笠井下組が焼失する。〔川島家文書〕	
一八四一	同一二		
一八四七	弘化 四	※20 下石田報徳社が創立される(報徳発祥の地)。	
一八四八	嘉永 一	笠井新田春日神社の社殿が焼失する。	
一八五四	同 七	安政東海大地震、震度八・二、死者三千人。	日米和親条約調印
一八五八	安政 五	**榎吉太八の父 磯平次が、榎吉家から離縁される。**	安政の大獄
一八六〇	万延 一	天竜川満水、中瀬・永島・倉中瀬村の三ヶ村で堤切れる。	桜田門外の変
一八六二	文久 二	大風雨で常光地内の大囲堤(おおがこいづつみ)(集落を囲んだ堤防)が切れ込む。	池田屋事件
一八六四	元治 一	笠井の糀屋清六が、安間村の久平等と共同出資で、横浜で貿易商社「遠州屋」を始める。	蛤御門の変
一八六七	慶応 三		大政奉還、王政復古の大号令

※20 疲弊した村を再興する為に、庄屋の神谷與平治(よへいじ)森之は、村人に安居院庄七(あぐいしょうひち)の報徳仕法を聞かせた。村人の総意で報徳社が出来、村は蘇った。

江戸	一八六八	慶応 四
		五月十一日、天竜川の堤防四一三四間が決壊する。遠州平野水害で家畑が三ヶ月冠水し、路上生活者がでる。金原明善は建白書を提出し、生涯をかけて堤防建設する事を決意をする。
		六月十一日、倉中瀬一二〇間、石原八〇間、中善地一〇〇間、堤防が決壊（この決壊により「十湖池」ができる）。石原村の小栗清九郎庄屋の要請を受け、松島授三郎【⬇50ページ】、神谷正信、中善地村は松島吉平（後の松島十湖）【⬇50ページ】、貴平村下は村井政一郎が報徳仕法で再興する。
		明治新政府成立（戊辰戦争始まる）

明治	（一八六八）	明治 一
	一八六九	同 二
		九月八日、明治と改元される。
		十一月一六日、笠井村で六百人の百姓一揆。山下佐治兵衛庄屋では家屋が打ち壊され、古文書が紛失する。廃仏毀釈が起きる。新政府に法永寺と定明寺の寺歴を提出し陳情する。
		浜松城代に井上延陵【⬇51ページ】
	一八七〇	同 三
		末島御嶽神社の発祥をなす御神像が栄徳霊神に鎮座する。
		苗字・職業・婚姻の自由
	一八七一	同 四
		廃藩置県により、遠江国は浜松県となる。
		郵便創業、切手発行
	一八七二	同 五
		浜松県三大区・八十二小区の区長（戸長）・副長が選出される。
		松島吉平が「三才報徳社」を中善地村で創設する。
		学制発布、断髪令※21

明治

一八七三	同六	「笠井郵便取扱所」が榎吉家に設置される。 （郵便取扱役 榎吉陽平）	郵便料金全国均一制 葉書発行
		笠井村戸長 山下五郎、副戸長 榎吉太八（二十二歳）【⬇4ページ】 **（明治八年まで）**	
		笠井村人口七八一人、一八三戸。	
		五月、法永寺金毘羅堂を仮教場として、大瀬学校笠井分校が設置される。	
		七月、源長院を仮教場として、羽鳥学校を設置。中野町・白鳥・恒武・新堀に分校が設置される。	
一八七四	同七	笠井上町 春日神社が村社（そんしゃ）となる。	※21 学制、近代的学校制度を定めた法令、フランスの学制にならい国民皆学教育の機会均等の原則実学の理念など国民の開明化を明示した。しかし、学制反対の一揆も起った。
一八七五	同八	**笠井村戸長 榎吉太八、副戸長 加藤清平・池田傳十【⬇49ページ】** **（榎吉太八は戸長を十二年間務め、その後役職名が村長となる。）** **笠井郵便取扱所が「笠井郵便局」と改称される。** 大瀬学校より分離独立して、笠井学校が設置される。 羽鳥学校より分離独立して、恒武学校と白鳥学校が設置される。 笠井新田村が「笠井新田村」と「上村（かんむら）」に分村する。 福来寺に巡査屯所（とんしょ）が設置される。 服織神社が郷社（ごうしゃ）となる。	遠江国報徳社設立 【⬇51ページ】

一八七六　同　九　笠井村に消防組（倭組・奈組・志組）が組織される。
浜松県が静岡県に合併する。

一八七七　同一〇　笠井警察分署の新庁舎が、村民の寄付金で下組に新築される。
現在の仲町公会堂の場所に、警察署長官舎が建設される。

一八七八　同一一　服織神社境内に、西南戦争で戦死した末島・羽鳥出身者三名を祀る招魂碑が建立される。

一八七九　同一二　※23 若倭神社（笠井春日神社相殿）の拝殿が建立される。
松島十湖が撫松庵を建て、築山に句碑を建立する。
遠州地方の綿作が盛んで、笠井村の収穫多し。
大瀬学校より分離して、笠井新田学校が井向東に設置される。
第一回県会議員選挙で、松島吉平（三十一歳）が当選する。

一八八〇　同一三　**笠井郵便局で為替取扱業務が始まる。**
若倭神社禮大祭（笠井春日神社相殿）の世話人が選出される。
（上組　加藤儀八・山下吉十、中組　榎吉太八・島田勘平、下組　青島忠平・高林善次郎）
若倭神社（笠井春日神社相殿）の神輿建造の準備が始まる。
完成までの間、中古の木造神輿で渡御を行う（九月八日・九日）。
羽鳥の杉浦仁平が、三河からガラ紡（和式紡績）を移入し、水車を動力源として稼働させる。

※22 西南戦争

※22 西南戦争（役）
（一八七七年二月から九月）
最大の士族反乱。鹿児島の私学校生を中心とした士族が西郷隆盛を擁して挙兵。熊本城を攻めるが落城せず、田原坂の戦い以後は敗退が続き、政府軍に鎮圧された。徴兵軍の力が認められ反抗が終った。

※23 明治政府の神社合併政策により、各地で神社が合祀され、笠井春日神社では若倭神社が合祀された。
神社の拝殿や神輿の建造を機に、「若倭神社」の禮大祭が始まり、春日神社が郷社となる昭和十二年まで続けられた。

一八八一	同一四	(株)笠井銀行が西浦通りに設立される。資本金八万円。(頭取 横田茂平) 若倭神社禮大祭(笠井春日神社相殿)の神輿を岡崎の業者に注文する。町内の寄付金が集まり始める。 松島吉平が引佐麁玉郡長に就任する(明治十九年まで)。	
一八八二	同一五	若倭神社(笠井春日神社相殿)の神輿が完成する。 笠井村の山下重兵衛【⬇50ページ】が東京へ徒歩で「笠井縞(じま)」を売りに行く。これを機会に東北、信州へ販路が広がる。 加藤平四郎【⬇49ページ】が「太物商物産社」を笠井に設立する。織物が笠井の市(いち)の中心となっていく。	西遠農学社設立 (松島吉平、松島授三郎 他)
一八八三	同一六	二月、豊田橋が開通。しかし明治二十二年に流される。 十二月十日、笠井村で大火発生。福来寺の観音堂等、上組と中組の一部の一〇九軒が焼失する。	
一八八四	同一七	**笠井郵便局で貯金取扱業務が始まる。** **笠井村と中善地村の戸長役場が、周辺の村も管轄する「連合戸長役場」となる。** 笠井上組が復興。伊豆石の蔵が建設される。 各所に奥山半僧坊(おくやまはんそうぼう)への道標が建立される。	

一八八五　同一八

松島吉平が長男の源一に家督相続し、「松島十湖」を本名とする。

一八八六　同一九

法永寺にて徴兵検査[※24]が行われる（上飯田外十四ヶ村、橋羽外二十ヶ村）。

羽鳥・恒武・白鳥学校等が併合し、尋常小学精量学校となる。（後に石原尋常小学校、豊西尋常小学校と改称）

一八八七　同二〇

福来寺境内に戸長役場が建設される（戸長　榎吉太八）。

笠井町北端に天満宮が建立される。

「西遠太物卸商組合」が笠井に設立される。（組合長　加藤平四郎）

山下青厓【⬇51ページ】が上京して、渡辺小華画伯へ入門する。

第三十三代

末弟　**重春**　榎吉左次右衛門尉

一八八九　同二二

笠井村外四ヶ村連合戸長役場が解かれ、笠井村・笠井新田村・上村の三ヶ村が合併し、新しく笠井村が発足する。

長上郡笠井村　村長　榎吉太八（二年間務め、その後　町長となる）

中善地村外九ヶ村連合戸長役場が解かれ、中善地・末島・中瀬・常光・貴平・恒武・石原・羽鳥・倉中瀬が合併し、「豊西村」が発足する。

豊田郡豊西村　村長　川合貞一郎

郵便取扱役の役職名が「三等郵便局長」となる

西遠農学社が「三遠農学社」に改名（松島授三郎、神谷正信）

逓信省が「〒」マークを制定

※24 徴兵令（明治六年公布）
国民皆兵の方針により、満二十歳以上の男性を兵籍に編入し、兵役につかせる法令。これにより徴兵制（度）が整備された。大村益次郎が発案し、山県有朋が継承して実現した。

町村制公布により、戸長は「村長」に改名される

東海道本線全線開通（東京・新橋から神戸）

第三十四代

正路 榎吉陽平（一八八九年逝去）

明治		
一八九〇	同二三	十月、恒武に「遠陽市場」が四十店で開設される。（発起人 中村藤吉【⬇50ページ】）
		福来寺の観音堂が、浜北・永島の明心寺より移築される。（発起人 山下吉十、加藤平四郎、池田傳十）
一八九一	同二四	**九月、町制施行して「笠井町」となる。長上郡笠井町 町長 榎吉太八（三十九歳）**
		聖観世音菩薩（しょうかんぜおんぼさつ）祭事の大祭日は一月九・十・十一日。藤枝の達磨が売られ、笠井の達磨市が始まる。
一八九二	同二五	四月、『日本博覧図静岡県初編』発行。豊西小、豊田橋等が掲載される。
		木俣物産（木俣千代八）が中組に開設される。
		笠井町長 鈴木新次郎
一八九三	同二六	笠井学校に笠井新田学校が統合され「笠井尋常（じんじょう）小学校」となる。
		浜松商工会議所設立。発起人三十人、笠井からは池田為吉と山下重平が選出される。
一八九四	同二七	遠州織物が好景気。
		金原明善が天竜川貨物取扱所を開設
		※25 日清戦争

※25 日清戦争（一八九四から九五年）
朝鮮の支配権をめぐる日清両国の戦争。日本の朝鮮政府に対する内政政革要求を清に拒否され、八月一日に宣戦布告、日本軍は優秀な軍事力で勝利を収め、戦費は二億円を要した。

一八九五	同二八	**笠井郵便局の郵便量が増える。全国では、郵便取扱量が明治二十一年の一億三千枚から四億四千万枚となった。戦地へ、また戦地からのハガキが増える。** 若倭神社禮大祭（笠井春日神社相殿）で、上組は倭魂社、中組は政諾社、下組は笠勢司と命名される。	浜松に電灯が点灯
一八九六	同二九	**笠井郵便局で小包の取り扱いが始まる。** 笠井町と豊西村が、浜名郡の所属となる。 笠井委託（株）が開業する。（社長 鈴木新次郎） 外国綿花輸入により綿花栽培が激減し、糸瓜、生姜、落花生が遠州三品と呼ばれて栽培されるようになる。 乗合馬車（笠井ー浜松）の運行が始まる。 十一月二十九日、笠井警察分署が仲町へ新築移転する。所轄区域は「笠井・豊西・龍池・中瀬・赤佐・北浜・小野口・積志」。 末島御嶽神社の境内に、百人一句塚が建立される。 （発起人 松島十湖）	豊田佐吉、動力織物機を発明（生産能力が拡大）
一八九七	同三〇	**笠井郵便局で電信の取り扱いが始まる。** **榎吉太八局長（四十五歳）、榎吉純（十六歳）は逓信を学ぶ。**	
一八九八	同三一	笠井銀行が資産銀行へ合併する（資産銀行はその後の合併で遠州銀行となり、現在の静岡銀行に至る）。 木俣物産（合）と丸加加藤商事（株）が鍛冶町へ移転する。 笠井町長 今泉保太郎	

一八九九	同三二	笠井街道が改良。新しい道路は遠陽市場内を通るようになる。若倭神社（笠井春日神社相殿）の本殿が建築される。祭典日は八月十六・十七・十八日となる。 十月、松島十湖が浜名郡議会の議長に就任する。
一九〇〇	同三三	パリ万博に笠井の糸瓜を出品。良質で高評価される。
一九〇一	同三四	笠井委託が（株）笠井銀行に組織変更する。（頭取 鈴木新次郎）
一九〇二	同三五	天満宮の場所に御仮屋（おかりや）が建設される。 中町浅羽屋の火事で浅羽屋は東浦へ引っ越す。跡地に笠井街道から東への道路ができる。
一九〇三	同三六	十月、松島十湖が浜名郡議長に再選する。
一九〇四	同三七	笠井町長 鈴木鰯三郎（わさぶろう） 本町に永世銀行笠井支店、上町に資産銀行笠井支店が開店する。 七月、池田橋が流失する。水車を使ったガラ紡が廃止される。 八月、近藤友月（松島十湖の次男）が日露戦争にて戦死。十一月、源長院に「衛国碑（えいこくひ）」と句碑群が建立される。

池谷七蔵、片面形糊付機を完成（翌年、宮本甚七と共に日本形染の前身となる会社を設立）

久根鉱山と王子製紙が、中野町へ天竜川の舟輸送を開始

※26 日露戦争（一九〇四から〇五年）
満州・朝鮮をめぐる日露両国の戦争。日本国の仁川港・旅順港奇襲攻撃に始まる。奉天会戦を経て、日本海海戦で勝利。米大統領の調停でポーツマス条約に調印。日本は国際上優位な地位を示めす一等国となった。

※26 日露戦争

一九〇六　同三九

笠井郵便局全図「東は天竜川、西は三方原、北は西鹿島、南は中ノ町局まで」〔榎吉家文書〕。

榎吉太八が、若倭神社（笠井春日神社相殿）の氏子総代になる。（大正二年まで八年間）

福来寺に一人一基句碑群、大木隨處（大木九市郎）【⬇49ページ】が発起人となり建立する。

日本形染（株）の取締役に木俣千代八が就任する。（社長 宮本甚七）

山下青厓が静岡市大東館で、英国王室コンノート殿下、東郷元帥、黒木大将の御前揮毫をする。

一九〇七　同四〇

十一月、「笠井報徳社」が設立される。理事長 大木久市郎（三十五歳）、監事 榎吉純（二十六歳）

一九〇八　同四一

笠井町の笠井往還に五〇〇軒の町並み、織物産業と商店会が繁栄する。

山下青厓は伊藤博文の知遇を受け、画伯の名声が広く知れ渡る。

笠井上町 春日神社に「氏子安全」と掲げられた鳥居が建立される。

一九〇九　同四二

福来寺初市の早朝に、笠井尋常小学校の少年消防隊員が交通整理をする。

金原明善、陸路輸送の集荷場を建設（中ノ町村半場）

明治	一九一〇 同四三	笠井尋常小学校に高等科が設置され、「笠井尋常高等小学校」となる。 十二月、鹿島―浜松間に軽便鉄道が開通する（後の西鹿島線）。 **笠井郵便局で電話の取り扱いが始まる。**
明治	一九一一 同四四	四月、福来寺で聖観世音菩薩立像が開帳され、寄付単の石碑が建立される。
明治	一九一二 同四五	
大正	（一九一二） 大正一	法光院 黒澤潜龍住職の時に、法永寺と定明寺の笠井新田の檀家（だんか）を大木元次の仲立ちで法光院へ移籍する。
大正	一九一三 同二	笠井町の藤原兵吉が演劇場「神徳座（しんとくざ）」を若林に開業する。
		浜松市制施行 （市長 鶴見新平） 遠江国報徳社が「大日本報徳社」と改称 七月三十日 明治天皇崩御

大　　正

一九一四　同三

広巾（ひろはば）織物が関西方面、インド、中国輸出で好景気。
五月、西ヶ崎－笠井間に軽便鉄道が開通（笠井線）。ミニＳＬが客車を牽引して一日十二往復する（所要時間十六分）。
笠井警察署分署が浜松警察署に編入される。
榎吉太八（六十二歳）逝去。
笠井郵便局は榎吉純が家督相続して三代目局長に、美濃屋は榎吉礼三が相続する。

第三十五代

嫡子 **重厚** 榎吉太八（一八五二年～一九一四年）

笠井郵便局に「十湖私書箱」が設置される。笠井郵便局では松島十湖宛ての手紙が半数を占めた。

※27 第一次世界大戦始まる
東京駅開業

※27 第一次大戦（一九一四から一八年）
ボスニアの都サラエボにおけるオーストリアの帝位継承者夫婦暗殺が引き金となる。ドイツ・オーストリアなど四ヶ国の同盟国と英・米・仏・露など二十七ヶ国の連合国との世界戦争。パリの講和会議で締結されたベルサイユ条約で終結。

一九一五　同四

笠井町 戸数七一九、人口三七九四人
浜松区裁判所笠井出張所と登記所が、西浦通りに建設される。
笠井町女子技芸学校が開校する。
福来寺に廻り舞台が作られる。
（倭魂社若連 小倉茂社長他）

第三十六代

二男 **正重** 榎吉政治（一八七六年～一九二二年）

大　　正

一九一六	同五	**笠井郵便局で簡易保険の取り扱いが始まる。** 「倭魂社（上町）」から「精華團（せいかだん）（住吉町）」が独立する。 山下青厓（五十八歳）が東京美術倶楽部で個展を開く。十湖一門が応援に行く。	電気が普及し、浜松に映画館ができる
一九一七	同六	七月一日、松島十湖金婚式。 源長院の参道入口に石門柱が建立される。 「国宝の御堂を守る若葉かな」 笠井町長 門奈仁三郎	
一九一八	同七	遠州織物好況、成金が続出する。 笠井町役場が西浦通りに新築移転する。 福来寺の句碑と忠霊碑が御殿山に移転する。	※28 スペイン風邪流行、死者数推計一七〇〇万～五〇〇〇万人
一九二〇	同九	笠井上町 春日神社が再建される。 第一回国勢調査、笠井・豊西の人口七五七五人。 源長院に豊川稲荷が勧請される。 三遠農学社に貢献した人物の顕彰碑（けんしょうひ）が源長院に建立され、同時に祭事が行われる。	※28 スペイン風邪 米国から世界中に広がったインフルエンザ。スペインでの流行が大きく報じられたことからの称。
一九二一	同一〇	笠井町役場に鉄骨の火の見櫓（やぐら）（高さ十五メートル）が建設される。	中ノ町堤防沿いに、製材工場二十社が営業

大　　正

一九二二　同一一　「笠井町実業同志会」を結成、小巾（こはば）織物業者五十人が参加する。

一九二三　同一二　八木橋周助【⬇50ページ】が「笠井自動車商会」を開業。笠井上組の資産銀行跡地を買収して営業を始める。定員六～八人のバスで浜松－笠井間を一日六往復した（片道一時間弱、運賃三十五銭）。

笠井銀行（旧笠井委託）が合併して、浜松商業銀行笠井支店となる（その後、合併で安田銀行（現みずほ銀行）笠井支店となり、昭和三年頃に閉店した）。

「倭魂社（上町）」の屋台が完成する。

学制発布五十年を記念し、豊西村図書館が設立される。

九月一日、関東大震災発生。福来寺の観音堂に被害あり。

一九二四　同一三　三月六日、恒武の遠陽市場で火災、十九店が全焼。三十五年の幕を閉じる。

笠井町女子技芸学校が出火焼失する。

一九二五　同一四　**榎吉純が学務委員を務める（昭和三年まで五年間）。**

四月、「笠井職業女学校（甲）」[※29]が開校。全国で五十九校が認可、静岡県では一校だけが選出される。

四月、私立笠井幼稚園が木俣五三郎により開設される。妻の木俣なみが園長となる。

「豊西村誌」が発行される。

※29 職業学校一覧（文部省）〔榎吉家文書〕によれば、静岡県笠井職業女学校（甲）の定員は三百名。入学資格は「高一修」とすっきりしているが、東京の共立女子職業学校や大妻技芸学校は定員は千五百名程度で、分科・夜間もあるなど多彩である。

大正	一九二六　同一五	「笠勢司（本町）」から「神勢團（しんせいだん）（春日町）」が独立する。 「笠勢司（本町）」と「政諾社（中町）」の屋台が完成する。 四月、鴨江観音境内に「十湖銅像」が建立される。 四月、「笠井信用組合」が設立される。 （組合長 山下吉十（二十八歳）、出資者二十四人） 木俣千代八が誘致した「日清紡績（株）浜松工場」が貴布祢に開業する。
昭和	（一九二六）昭和一	十二月二十五日 大正天皇崩御
	一九二七　同二	笠井小学校にアメリカの子供達から「フレンドシップ・ドール（友情人形）」が国際交流で贈られ、人形歓迎会が開かれる。 伊藤豊太郎【⬇49ページ】が大般若経（だいはんにゃきょう）五百万文字写経を書き始める。 十湖会組織会長に大蕪庵沈水（だいぶあんちんすい）（松島十湖の長男源一）。
	一九二八　同三	竹林隆二（豊西村貴平）がオランダ・アムステルダムオリンピックに出場、競泳自由形で準決勝に進出する。 笠井線に軌道（きどう）自動車（ガソリンカー）が走る。 西町が住吉町と改名される。 笠井町長 金田太平
		高柳健次郎、 世界初のテレビ実験成功 日本楽器社長に 川上嘉市就任

一九二九　同四　見付地方専売局の建物の払い下げを受け、西浦通りの笠井幼稚園西隣に移築される。煙草の葉の収納庫として使用する。

若倭神社（笠井春日神社相殿）の社務所が改築される。

笠井上町 春日神社が、神饌幣帛料供進神社（しんせんへいはくりょうきょうしんじんじゃ）に指定される。

笠井自動車商会が浜松自動車に合併する（後に遠州鉄道へ統合）。

一九三〇　同五　昭和天皇が県下産業教育等視察のため御巡幸される。

御殿山稲荷神社の社殿が完成、三十四年の歳月を要した。

司馬老泉【⬇49ページ】の発起と笠井町の有力者の寄進による。

遠州大念仏団が結成され、七十団体が参加する。

笠井を中心に栽培された糸瓜（へちま）が五百万本出荷される。

若倭神社（笠井春日神社相殿）の正面石垣を建設。加藤實次郎、加藤伊久蔵、加藤清七が寄贈した。

豊雷神社（笠井春日神社に鎮座）の鳥居は池田龍之助、加藤弥太郎が寄贈した。

一九三一　同六　二月二十一日、「笠井町商工会」が創立され、これに笠井町実業同志会が合流する。

常光地区に浜松市上水道水源ポンプ場が完成する。

一九三二　同七　『笠井郷土の俤（おもかげ）』が笠井尋常高等小学校から刊行される（笠井の歴史）。

笠井町立青年訓練所が開設され、二十七名が参加する。

※30 世界大恐慌

※30 世界大恐慌
暗黒の木曜日というニューヨークのウォール街の株価暴落にはじまり、全資本主義世界に波及、日本経済も大打撃を受け昭和恐慌として深刻化。

※31 満州事変
（一九三一から三三年）
柳条湖での満州鉄道爆破を機に東三省を武力占領し、満州国として独立させた。以後日中戦争から太平洋戦争を通算して十五年戦争ともいう。

※31 満州事変勃発

五・一五事件

		遠州輸出織物工業組合永久社の加藤藤九郎、金田太平、木俣政八等が東南アジアを視察する。
		竹林隆二が米国ロサンゼルスオリンピックに出場、水球チームで四位に入賞する。
一九三三	同 八	**笠井郵便局が洋風局舎に新築される。（棟梁 住吉町・高林清太郎）**
		若倭神社（笠井春日神社相殿）の寶庫（ほうこ）が建設される。
一九三四	同 九	**榎吉竹治（二十六歳）が「美濃屋酒店」を開店する。**
		若倭神社禮大祭（笠井春日神社相殿）に六メートルの蛇篭（じゃかご）（白布を巻いた大鳥居）が登場する。笠勢司が当番で建立した。
		笠井町長 小倉一丸
一九三五	同 一〇	糸瓜の出荷が一千万本。糸瓜仲買商は好景気。
		十月、定明寺の本堂を改築。源長院の長屋門が移築される。
一九三六	同 一一	**榎吉良三（三十歳）が笠井郵便局に入局する。**
		笠井尋常高等小学校・静岡県笠井職業女学校 正門改築事業が有志の寄付金 合計八百六十六円六十六銭で完工する。（現小学校正門）〔榎吉家文書〕
		御殿山西隣の忠魂碑の参道に鳥居が建立される。
		鈴木龢三郎の銅像が建立される。遠州織サロンの海外輸出と発展に尽くした功績が称えられた。

	丹那トンネル開通
	ＮＨＫ浜松放送局開局

一九三七	同一二	日中戦争で綿花・綿糸の統制があるも、遠州織物は最高水準の好景気。	※32 日中戦争 松菱百貨店開店 国家総動員法公布
一九二八	同一三	笠井春日神社が郷社（ごうしゃ）となる。本殿の石垣が築かれる。 非常時に付き、屋台行動が中止される。	
一九三九	同一四	木炭ガス自動車が運行される。浜松自動車（株）八木橋周助社長	国民徴用令公布 二俣線（現天竜浜名湖線）全通
一九四〇	同一五	福来寺に地方卸売「笠井青果市場」が開設される。（発起人 坂田作蔵）	太平洋戦争に突入
一九四一	同一六	**笠井郵便局が特定郵便局となる。** **笠井報徳社が榎吉純（六十歳）により継承される。**	※32 日中戦争 盧溝橋（ろこうきょう）事件に端を発した日中戦争。戦争は上海陸戦隊の大山勇夫中尉射殺事件を機に上海にも拡大。一九四五年の日本の降伏まで継続。戦火の拡大で名称も変化した。
一九四二	同一七	小学校が国民学校と改称される（笠井町国民学校、豊西村国民学校）。 笠井町国民学校正門から住吉町へ東西の道路が開通する。 （株）笠井青果市場が設立される。（社長 石井彦太郎） 笠井町長 中安清雄 大東亞記念館が完成。笠井町国民学校の講堂として使用される。（棟梁 高林清太郎）	

昭和

		美濃屋の敷地で「三高木工製作所」が創業される。旧家の広い空地を利用した。（出資者 三室義晴、現場監督 高林弘一）
		その後、田村毅一【⬇50ページ】に譲渡され「浜名木工製作所」となり、机・椅子・弾薬箱を製造する。
一九四三	同一八	遠州銀行笠井支店が合併により、静岡銀行笠井支店となる。 笠井町国民学校に大相撲力士の前頭東富士（まえがしらあずまふじ）が来る。
一九四四	同一九	笠井線（西ヶ崎－笠井間の軽便）廃止。線路跡は道路（現浜松環状線）として整備される。 法永寺に東京・東調布第二国民学校（現大田区立田園調布小学校）の三年生五十名と女性教員二名が疎開に来る。 十二月七日、東南海地震発生、豊西地区で被害大。福来寺の観音堂に被害あり。 十二月二十三日、浜松大空襲で市内壊滅する。 笠井町町長 石井彦太郎	遠州鉄道、六社統合で発足
一九四五	同二〇	**五月十八日、榎吉良三（三十九歳）が笠井郵便局の四代目局長に就任する。** 静岡銀行（現在、遠州信金笠井支店が立地）から西への道路が、延焼を防ぐためにできる。 六月十七日、浜松大空襲があり市中は焦土化する。 八月十五日、太平洋戦争が終わる。	広島・長崎原爆 ソ連参戦 日本無条件降伏

一九四六	同二一	農地改革が行われる。農地委員が選出され、翌年からの農地の買い上げで、笠井の農家は一四三戸が自作農家となる。 綿糸一万梱（約千八百トン）が浜松地方の繊維業界へ供与される。 笠井職業女学校が「笠井高等女学校」に改称する。 笠井町長 大木清作	通貨の旧円使用禁止 十一月三日 日本国憲法発布
一九四七	同二二	市町村に教育委員会が設置される。 国民学校が小学校と改称される（笠井小学校、豊西小学校）。 笠井中学校と豊西中学校が設置される。 笠井中校長に鈴木潔、ＰＴＡ会長に小倉一丸、 豊西中校長に小杉撰次、ＰＴＡ会長に松島達太郎が就任する。 笠井中学校の野球部が西部大会で優勝する。 笠井高等女学校が北浜高等女学校と合併して「静岡県立浜名高等女学校（現浜名高等学校）」となる。 第一二回県会議員選挙、松島舜治（五十五歳）が当選する。	教育基本法の制定 学制改革六・三制 五月三日 日本国憲法施行
一九四八	同二三	**笠井農協と豊西農協が設立されて、報徳社の使命が終焉する。** **榎吉純（六十八歳）が笠井報徳社の解散手続きを行う。** 笠井が野球の盛んな町になる。 八木橋周助がプロ野球ホームラン王の大下弘を笠井小グランドに呼ぶ。 笠井町長 田口雄太郎	

昭和

一九四九	同二四	浜名木工製作所で自動車車体（4トントラック等）の製作開始、「浜名自動車工業（株）」に改称する。
		笠井商店会が初市にサーカスを呼ぶ。
		笠井祭典で福来寺に大吹き流しが立つ（倭魂社が担当）。
		松島芳郎監督で笠井中野球部は一市二郡野球大会で優勝する。
		笠井中校長に橋本正十、豊西中校長に久保鉄太郎が就任する。
		お年玉付郵便はがき発行
一九五〇	同二五	松島芳郎監督で笠井中野球部は再び一市二郡野球大会で優勝する。
		朝鮮戦争勃発※33
一九五一	同二六	笠井中校長に岩崎正平（昭和三十年まで六年間）、ＰＴＡ会長に松島舜治が就任する（昭和二十七年まで三年間）。
		笠井町と豊西村が合併し、新しく「笠井町」が発足する。
		笠井商店会が祝花火を二百発打ち上げる。
		笠井小は笠井町立西小学校、豊西小は笠井町立東小学校となる。（昭和二十九年に名称が笠井小、豊西小に戻る）
		笠井中と豊西中が合併して、新しく「笠井中」が発足する。
		朝鮮戦争で「ガチャマン景気」。笠井の織物業は大繁盛。
一九五二	同二七	笠井街道が舗装される。
		十月、笠井中で新校舎の落成式。十五クラス、六八五名。
		ラジオ静岡（ＳＢＳ）放送開始

※33 朝鮮戦争（一九五〇年六月から五三年七月）
朝鮮半島の北緯三十八度線の侵犯をきっかけに、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の対立した戦争。米国・中国も応援し一進一退の戦闘を続けた。

一九五三	同二八	御殿山の百句塚と忠霊碑が、法永寺へ移設される。 倉中瀬・大川の水車が終わる。 達磨市に笠井町の「大屋（だいや）（寺田弘吉・たか）」が出店、焼津達磨を販売する。 **笠井中ＰＴＡ会長に榎吉良三が就任する（昭和三十四年まで七年間）。**	ＮＨＫテレビ放送開始
一九五四	同二九	笠井中で講堂の落成式。校歌もできる。 三月三十一日、笠井町は浜松市へ合併する。 浜松市笠井町、人口一一六一〇人、二〇五七世帯。 福来寺に笠井小の逢拝門（ようはいもん）が移築される。 浜名自動車工業（田村毅一社長、五十四歳）が事業拡張のため、榎吉家屋敷内から西の山（現リブロス笠井の位置）へ移転する。	自衛隊発足 ビキニ水爆実験
一九五五	同三〇	法永寺の金毘羅堂が焼失する。 市議会議員選挙、田口雄太郎・内藤賢治が当選する。 第一四回県会議員選挙、松島舜治（六十三歳）が当選する。	
一九五六	同三一	笠井中は十五クラス、七五三名。運動場土留め工事が完成する。 竜西商店会連盟が発足する。会長は笠井商店会 田口雄太郎。 福来寺奉賛会（ほうさんかい）の山下吉十、山下重平、山下保治、名倉徳太郎、川島光次郎が、十二年間放置された観音堂の修復を話し合う。 八木橋周助が舘山寺観光開発を設立し、舘山寺の観光に情熱を注ぐ。	浜松オートレース開場 東海道本線全線電化 佐久間ダム完成

昭和

一九五七	同三二	糸瓜（へちま）の売上げが最高を記録。 戦時中、法永寺に疎開に来た田園調布の生徒六名が笠井小を訪問。「恩」の碑を寄贈する（現在も小学校に設置されている）。 浜名自動車工業で大型トラック荷台の生産が始まる。後に特殊車両運搬車、ダンプ、トレーラーも生産される。（田村慎一）	静岡国体開催
一九五八	同三三	**榎吉純（七十七歳）逝去【勲六等瑞寶章（くんろくとうずいほうしょう）を賜（たまわ）る】。** 浜松北保健所が笠井町に開設される。 笠井土地改良区ができる。	浜松城天守閣再建 秋葉ダム完成
一九五九	同三四	笠井祭典で蛇籠の大鳥居を廃止。お囃子（はやし）の手踊りも中止する。 三月、蛭子森古墳が発見される。 市営バス笠井・豊西線の運転が始まる。	皇太子ご成婚 浜松放送局テレビ放送開始 浜松初のスーパー「主婦の店」開店
一九六〇	同三五	舘山寺ロープウェー開通。遠鉄観光開発（株）八木橋周助社長	ＳＢＳテレビ放送開始 東海道新幹線の工事開始
一九六二	同三七	蛭子森古墳で発掘調査。浜松市史跡に指定される。 神武景気（じんむけいき）で生コン工場は多忙なり。	
一九六三	同三八	笠井祭典で渡御の馬が廃止される。 笠井街道の拡幅工事、本町は西へ、上町は東へ広げる。 糸瓜産業、輸出一億円。 市議会議員選挙、内藤賢治と日下部孝造が当選する。	

昭和

一九六四	同三九	達磨市で「金達磨」を始める。 福来寺境内に、第二自治会が「児童公園」を作る。	東海道新幹線 開通 東京オリンピック 開催
一九六五	同四〇	**仲町にさつき通り開通。榎吉竹治（五十六歳）、平之助（二十四歳）が屋敷の土地を提供する。** 福来寺で二十一年間未修繕であった観音堂西側の壁や回廊等の修理が始まる。 豊西小学校が学校給食で文部大臣賞を授章する。	
一九六六	同四一	豊西農協会館が完成する。	
一九六七	同四二	**電話の自動化に伴い、笠井郵便局の電信電話業務が廃止される。** 三月、笠井中の二階建て校舎（職員室を含む八室）が焼失する。 市議会議員選挙、内藤賢治と日下部孝造が当選する。 架設促進同盟会、後の浜名会【⬇51ページ】が設立される。 「天竜川に橋を架けよう」（会長 田村毅一）	
一九六八	同四三	五月、笠井中に四階建校舎（八教室）が落成される。（校長 鈴井賢作、ＰＴＡ会長 源馬弘） 七月十七日、笠井中で再び火災。西側の木造二階建て校舎（六教室）が焼失する。 浜松北保健所が廃止される。	郵便番号導入

昭和

一九六九	同四四	四月、「青和会」【⬇51ページ】が創立される。第一回盆踊り大会を開催する。（会長 竹内正治）	東名高速道路開通 浜松バイパス開通
		五月、笠井中に四階建校舎（八教室）が落成される。（校長 鈴井賢作、ＰＴＡ会長 源馬弘）	
一九七〇	同四五	笠井祭典が八月十四・十五・十六日に決定する。 東部衛生工場が豊町に完成し、緑地公園ができる。	浜北大橋完成 日本万国博覧会開催
一九七一	同四六	県立浜松東高等学校が笠井新田町に開校する。 五月、笠井中に新校舎落成。十一月、前庭が完成する。（校長 須部公、ＰＴＡ会長 寺田好） 市議会議員選挙、内藤賢治（七十八歳）が当選する。	
一九七二	同四七	「笠井グリーンスタンプ」が田村滋治の勧誘で結成される。 「笠井奉仕の会」と二団体となる。 笠井・豊西・中ノ町・長上の農協が合併して、「浜松東農協」となる。	沖縄日本復帰 流通元町に産業展示館、トラックセンター完成
一九七三	同四八	**榎吉家が明治六年から約百年世襲した特定郵便局が終わる。普通郵便局が笠井第八の地区に新築移転され、榎吉良三は普通郵便局の初代局長となる。** 糸瓜産業が衰退していく。 笠井小と豊西小で開校百周年記念式典が行われる。	浜松西インター開通 船明ダム完成

昭和

一九七五	同五〇	**榎吉良三が笠井郵便局を退職する。四代世襲した郵便局長職が終わる。** 四月、笠井商店会六十四店参加の「ジョイシール」発行。笠井奉仕の会や笠井グリーンスタンプの会員等が参加する。（会長池田譲） 八月、「十日市実行委員会」発足。第一回納涼夜店市が開催される。（委員長 池田充義） 十月、青和会会長に鈴木眞司。笠井中野球部の為に、川上哲治野球教室を開催。（田村滋治の手紙が川上哲治のハートを射止めた） 市議会議員選挙、内藤賢治（八十二歳）が当選する。 十一月、第一回町民体育大会が始まる。	
一九七六	同五一	笠井春日神社祭典の年番長に池田充義（五〇年九月～五一年八月）。架設電話設置や花火の広告冊子の変更を行う。 四月、青和会会長に池田充義。第七回盆踊大会を開催、笠井音頭を発掘する。 十一月、遠鉄ストア笠井店が開店する（商店会に流通革命）。 豊西土地改良区が完成する。	
一九七七	同五二	竜西商店会有志がセブン・イレブンの視察に行く。都会は商売の方法が大きく変化していた。 笠井公民館が新築落成される。 浜名会の人数が増え、会合場所が新田第二公会堂になる。	浜松医大付属病院開院

昭和

一九七八　同五三　ヤオハン・グリーンエイト笠井店が開店する。
常光浄水場が完成する。
笠井中体育館が完成する。
浜商野球部が選抜大会で優勝。笠井支部が結成され、百名が参加する。

一九七九　同五四　「春日社（笠井上町）」の手作り屋台が完成する。
三十七年使用した笠井小の講堂（大東亜記念館）が、耐震強度不足の為に解体される。
浜松東農協本所が建設される。
市議会議員選挙、源馬弘が当選する。

一九八〇　同五五　豊西小学校の体育館が完成する。
末島御嶽（おんたけ）神社の社殿が完成する。ここに若倭神社禮大祭で明治十三～十四年に使用の木造御輿が保管されていたが解体される。

一九八一　同五六　「倭魂社（上町）」の屋台が完成する。
美濃屋主人　榎吉竹治（七十二歳）逝去。榎吉平之助（四十歳）が就任する。

第三十七代

嫡子　**重直**　榎吉竹治（一九〇九年～一九八一年）

浜松博物館完成
東海道線浜松駅　高架化完成

一九八二	同五七	**笠井中学校が「わが郷土 笠井地区 その風土と文化」を刊行する。（学校長 大塚薫、ＰＴＡ会長 田村慎一、笠井地区連合自治会長 榎吉良三）**	
一九八三	同五八	笠井公民館付設体育館が完成する。 恒武町に学習等供用施設「恒武会館」が完成する。 市議会議員選挙、源馬弘が当選する。	浜松市が五十万都市となる 浜松テレビが社名変更、「浜松ホトニクス」となる
一九八四	同五九	笠井春日神社が改築される。	
一九八五	同六〇	源馬弘が浜名会の会長に就任する。	遠州鉄道高架化完成（新浜松駅～助信駅）
一九八六	同六一	豊町下御嶽（みたけ）神社が改築竣工される。 九月、「子育地蔵尊（こそだてじぞうそん）」が西の山に移される。〔松島光男記〕	
一九八七	同六二	笠井商店会会長 池田充義の時に、十二年続いた「納涼夜店市」が終了する。 市議会議員選挙、源馬弘が当選する。	国鉄民営化 都田テクノポリス建設開始
一九八九	同六四		一月七日 昭和天皇崩御
（一九八九）	平成一	平成に改元される。	消費税創設（３％）

平成

一九九〇	同二	豊町羽鳥の八幡神社と、恒武下の六所神社が改築される。 笠井春日神社の輿車及び収納庫が落成。輿車で神輿の渡御が始まる。	浜松アリーナ開館
一九九一	同三	恒武妙光寺にて、時宗遊行上人が御賦算される。 豊町上土地改良事業が完成。記念碑が建立される。	
一九九二	同四	笠井観音「慈光会」【⬇51ページ】が発足する。 （会長 久島實、会員百名）	学校五日制 はままつ友愛のさと完成
一九九三	同五	笠井中三年生の小栗忠が、三段跳で日本中学新記録を作る。 （一四・五八メートル） **榎吉良三逝去【従五位勲五等に敘し瑞宝章を賜る】。**	都田テクノポリス完工
一九九四	同六	笠井郵便局の集配業務が積志郵便局へ移管され、無集配局となる。 福来寺で聖観世音菩薩立像が開帳される（明治四十四年の開帳以来八十三年ぶり）。	アクトシティ完成
一九九五	同七	浜名自動車工業（現浜名ワークス）が西の山から浜北・上島へ移転する。	とぴあ浜松農協発足 世界吹奏楽大会開催
一九九六	同八	「リブロス笠井」が浜名自動車工業の跡地に開店する。 笠井春日神社大祭の神輿が解体され、メンテナンスが行われる。	フルーツパーク開園

平　　成

一九九七	同　九	かささぎ大橋が開通。架設促進同盟会の設立から三十年の歳月を経て開通した。	消費税改定（５％）
二〇〇四	同一六	川べりを管理する「おー川・桜の水辺の会」が発足する。	浜名湖花博開催
二〇〇六	同一八	「おー川・桜の水辺の会」が、国土交通省指定「手づくり郷土（ふるさと）賞」を受賞する。	
二〇〇七	同一九	浜松市が政令市となり、笠井地区は東区の所属となる。	
二〇〇八	同二〇	**二月、榎吉平之助（六十七歳）逝去。**	

第三十八代

嫡子　**直秀**　榎吉平之助（一九四〇年～二〇〇八年）

「美濃屋酒店の主人の『メイク』は笠井商店会のチラシに掲載されて二十一年間、俳句のようで俳句ではない。川柳のようで川柳ではない。五七五の言葉遊び、その「ちょっと一言」は、平ちゃんの天賦のウイットに富んだユーモアで多くの読者を魅了した。笠井商店会、青和会、慈光会、仲町祭典年番、仲町屋台建設、共に汗を流した池田充義の追想である。」

松納め重き暖簾に幕を引く　平之助

内

笠井ゆかりの人物・団体

池田庄三郎勝彦（一七五五～一八〇六）
屋号「油屋」。稲荷神社神主。江戸時代の笠井村の豪商。内山真龍を屋敷に招待して、近隣の文化人と国学を学んだ。

十一代 池田傳十（一八三七～）
屋号「和泉屋」。蝋燭販売業。池田為吉と帯屋の本家。明治八年に笠井村副戸長（三十八歳）、明治二十三年に福来寺観音堂移築の発起人（五十三歳）。

伊藤豊太郎（一八六二～一九三九）
俳号「江山」、書家「蒲邨」。蒲村村長。松島十湖の妻（さの）の弟。豊川稲荷へ大般若経を寄贈した。豊川稲荷境内に豊太郎の碑がある。松島十湖の銅像建設に尽力した。

内山真龍（一七四〇～一八二一）
大谷村（現天竜区大谷）の庄屋。本名徳右衛門。二十一歳の時に賀茂真淵に師事す。五十九歳で「遠江国風土記伝」を刊行した。

大木久市郎（一八七二～一九四二）
俳号「七十二峰庵隨處」。明治三十二年に松島十湖の門弟となる。明治十八年に神谷正信の末娘（きと）と結婚。明治四十年に笠井報徳社を創立し理事長となる。明治四十三年から月刊誌「報徳」の田園俳句選者となる。大正末期、松島十湖宗匠宛て選句手紙の下書きをして宗匠を支えた。だるまの俳画が得意。若倭神社例大祭（笠井春日神社）に篳篥の奏者で参加。

小栗松靄（一八一四～一八九四）
本名武右衛門。豪農小栗仁右衛門守道の長男。八代目恒武村庄屋を継ぐ。文人墨客、詩人、水墨画。

小栗廣伴（一七七八～一八五一）
石原村庄屋。歌人、書家、漆器業で家計を盤石とした。平成二十年八月二十三日、服織神社勧請一三〇〇年記念の時に、小栗廣伴歌碑が境内に建立された。

加藤平四郎（一八四九～一八九四）
廉屋本家。幼名は直次郎、襲名して平四郎。明治十四年に笠井銀行副頭取（直次郎）、明治十五年に太物商物産社社長（以後平四郎）、明治二十三年に福来寺観音堂移築の発起人、明治二十五年～二十七年に若倭神社（笠井春日神社）総代となる。

司馬老泉（一八三六～一九一〇）
全国を遊歴した文化人。明治二十五年に笠井に定住して、松島十湖の門下に入る。明治二十九年に八幡山より笠井街道の西を描いた「望富岳真写」を発表。明治三十三年、荒廃した御殿山稲荷社の再興を笠井の有志と始めた。「望富岳真写」は現在福来寺観音堂に掲額されている。また、御嶽神社と十湖百句塚の句を描いた俳画はガイドブック「東区俳句の里」に掲載されている。

田村毅一（一八九四～一九八四）

明治三十四年、見付の「松風屋」の暖簾分けをして笠井に来た（毅一が七歳の時）。日露戦争で病気になった父が明治三十七年に亡くなって以来、母を助け、当主の役をこなしていった（福来寺、源長院などの寄付単に名前が掲示されている）。戦後に自動車産業に進出して、昭和二十九年に西の山へ工場を移転する。息子の慎一に「浜名自動車工業」を、滋治に「松風屋」を任せ、昭和四十二年、七十三歳の時に「天竜川に橋を架けよう」と会を組織して、笠井地域のために尽くす。現在、「浜名会」は地域の幅広い人達の懇談の場として活動している。

内藤彦端（一七四〇～一八一八）

俳号「酔春亭左光」。文化十三年に『遠津安布美句集』を版行。定明寺に左光の句碑「葡萄の実 熟したりけり 玉の色」がある。

六代目中村藤吉（一八五四～一九二三）

浜松・田町「棒屋」。小間物商。笠井の市に出店した報徳商人で、恒武町・遠陽市場（四十店出店）の発起人。浜松の豪商で、多くの会社設立に出資貢献。明治十六年、中村藤吉商店に松島十湖の三男松島保平が入店。番頭で「棒屋」を支えた後、独立して三立製菓（株）を創業した。

松島吉平（一八四九～一九二六）

俳諧の宗匠で、門弟が数千人いた。俳号「十湖」。浜松県公選民会議員、静岡県県会議員、引佐麁玉郡長、西遠報徳社顧問、三遠農学社顧問、大日本報徳社訓導を務めた。末島の御嶽神社に句碑群を建立した。現在、十湖の名を冠した俳句大会「十湖賞」が開催されている。

松島授三郎（一八三七～一八九八）

羽鳥村の薬種商で家伝薬の松島藤右衛門の養子となる。下石田村の神谷與平治宅にて安居院庄七から報徳を学ぶ。伊平村に引っ越し、一誠舎（報徳を学ぶ）を立ち上げた。引佐麁玉郡長になった松島十湖と気賀で再開して、西遠農学社を設立。明治二十年に三遠農学社の社長となる。農業の近代化と農家の生活改善を報徳運動を通して実践した。現在、源長院に「至誠軒練精の碑」が建立されている。

八木橋周助（一八九六～一九九三）

青森県生まれ。運転手になりたいと十六歳で奉公に出て、金を貯め二十二歳の時に上京した。青バス（現都営バス）運転手の難関試験に合格。大正九年、「浜松の宮本甚七さんが乗用車の運転手を探しているので行って欲しい」と上司に頼まれ浜松に来た。大正十一年に「浜松タクシー自動車商会」を宮本甚七の資金援助で開業する。翌年、笠井町で「笠井自動車商会」を興す。戦後の笠井町は野球熱が盛んで、多くの甲子園球児を輩出していた。八木橋は町の有志と笠井中の野球部後援会を組織して、松島芳郎先生の下、黄金時代を築く為に尽力した。舘山寺開発を手掛け、浜名湖の観光開発にも情熱を注いだ。

二代目山下重兵衛（一八五四～）

明治十五年、二十八歳の時に宮本宣吉の紹介状を持って、徒歩で箱根を越え、東京の森五商店へ笠井縞を売りに行った。この事により、笠井の市の商人が東北から信州まで売りに行くようになった。その後、笠井縞は遠州織物に発展した。

山下青厓（一八五八～一九四三）

慶応二年、貴布祢から父の小田直吉が笠井に来た。その後、青厓は山下吉十と養子縁組して「山下」の姓となった。明治二十年に上京して渡辺小華に入門。皇居宮の御杉戸四枚に花鳥図を小華の口伝で代筆して認められた。師が死亡後は、南画技法の書籍をいただき笠井にて学ぶ。明治三十九年と四十一年に御前揮毫して称賛される。仲町公会堂に「牡丹」と「鯉」が、笠井春日神社の社務所に「松に鷹」が残されている。

遠江国報徳社

明治八年に浜松町（当時）で設立され、二宮尊徳翁の弟子である岡田佐平治が初代社長となる。明治十八年、井上延陵に請い、曳馬古城跡に遠江国報徳社の第一館を建設。その後、東照宮の土地約二千坪、社殿、宝物、備品など一切を井上延陵から譲り受けた。明治四十四年に「大日本報徳社」と改称され、大正十三年には全国約七百社の報徳社が大日本報徳社に大合同した。

井上延陵（一八一六～一八九七）

明治元年徳川幕府の崩壊後、浜松城代として赴任。武士救済のため授産場を起こし、三方原に茶園を開くなど功績を残した。明治十九年に曳馬古城跡に東照宮の支社を築き、家康が愛していた八幡太郎の霊像を迎えて安置した。その後、東照宮の土地、社殿、宝物、備品など一切を「遠江国報徳社」へ譲った。

青和会（一九六九～活動休止時期不明）

昭和四十四年四月二十日に葵会館にて創立総会。会長に竹内正治。会員は五十八名で、二十代から三十代の青年が参加した。卒業は四十歳。経済、文化、新聞、レクレーションクラブで活動し、会員の家持ち廻りで会合した。第一回盆踊り大会、献血運動、笠井街道交通量調査、笠井発展研究会、川上哲治野球教室、第一回町民体育大会、豊西盆踊り大会、市会議員選挙応援、龍西マラソン大会など昭和六十三年までの記録冊子がある。卒業生は地元で年齢相応に地域のために活動をしている。

慈光会（一九九二～二〇〇八）

笠井達磨市の応援団として結成される。会長久島實、事務局池田充義。会員約百五十名。年会費三千円。笠井の観音様御開帳（明治四十四年以来八十三年ぶり）。福来寺境内の車庫を改造して納め達磨・種銭、甘酒無料提供、幟の販売。本堂を片付けて「だるま会館」として再生した。その他、看板の設置や法被を揃えた。

笠井だるま市保存会（二〇〇八～現存）

池田充義、田村滋治、川島庸夫、山下勝哉、門奈運東、照井清一、福来寺住職の黒澤龍司で、達磨市の運営や福来寺の維持管理を行っている。運営委員会やボランティア総勢七十人。

笠井商店会（一九七五～二〇二一）

笠井の商店六十四店が参加して「ジョイシール」を発行。毎月チラシを発行した（六百十回）。笠井商店会や慈光会の発足は、青和会の青年の熱意が成就させた。

編集後記

笠井の歴史は、「豊西村誌」「笠井の俤」「わが郷土」「わが町文化誌笠井」と詳しく出版されてきました。この度は、春日神社に、江戸時代から「榎吉氏」と刻まれている榎吉家について、榎吉清光氏に調査・執筆をお願いし、報徳社の面々で検討を重ね、修正・加筆して「笠井の歴史と榎吉家の系譜」と題してここに発表します。従来の笠井の歴史に、新しい発見があれば幸いです。（池田充義）

【参考文献】

群馬県太田市史、浜松市史、山口県浅海家家譜、天神町中村家系図、日本歴史シリーズ全（世界文化社）、日本史用語大辞典（柏書房）、浜松の歴史（大塚克美編著）、静岡県の歴史（若林淳之）、日本歴史大辞典、静岡県の地名、浜名郡地誌、遠淡海地誌、源姓新田・足利系図、静岡県姓氏家系大辞典、年表日本歴史、日本国語大辞典、浜松の石造文化財、日本中世史事典（朝倉書店）、日本歴史大辞典、仏教語大辞典、鎌倉室町大辞典、遠江国風土記伝（内山真龍）、寺院概要、日本郵便創業の歴史、日本三代實録、みんなの郵便文化史、新田荘遺跡、新田荘歴史資料館（資料・協力）、頭陀寺縁起、戦国武将合戦事典、群馬県姓氏家系大辞典、新編姓氏家系辞典、新訂新田族譜（世良田東照宮）、豊西村誌、榎吉家資料・文書

笠井の歴史と榎吉家の系譜

令和３年９月30日　発行

編著者・題字　榎吉清光
〒431-3107 静岡県浜松市東区笠井町514番地

資料調査　榎吉光子、榎吉正幸、榎吉弘幸

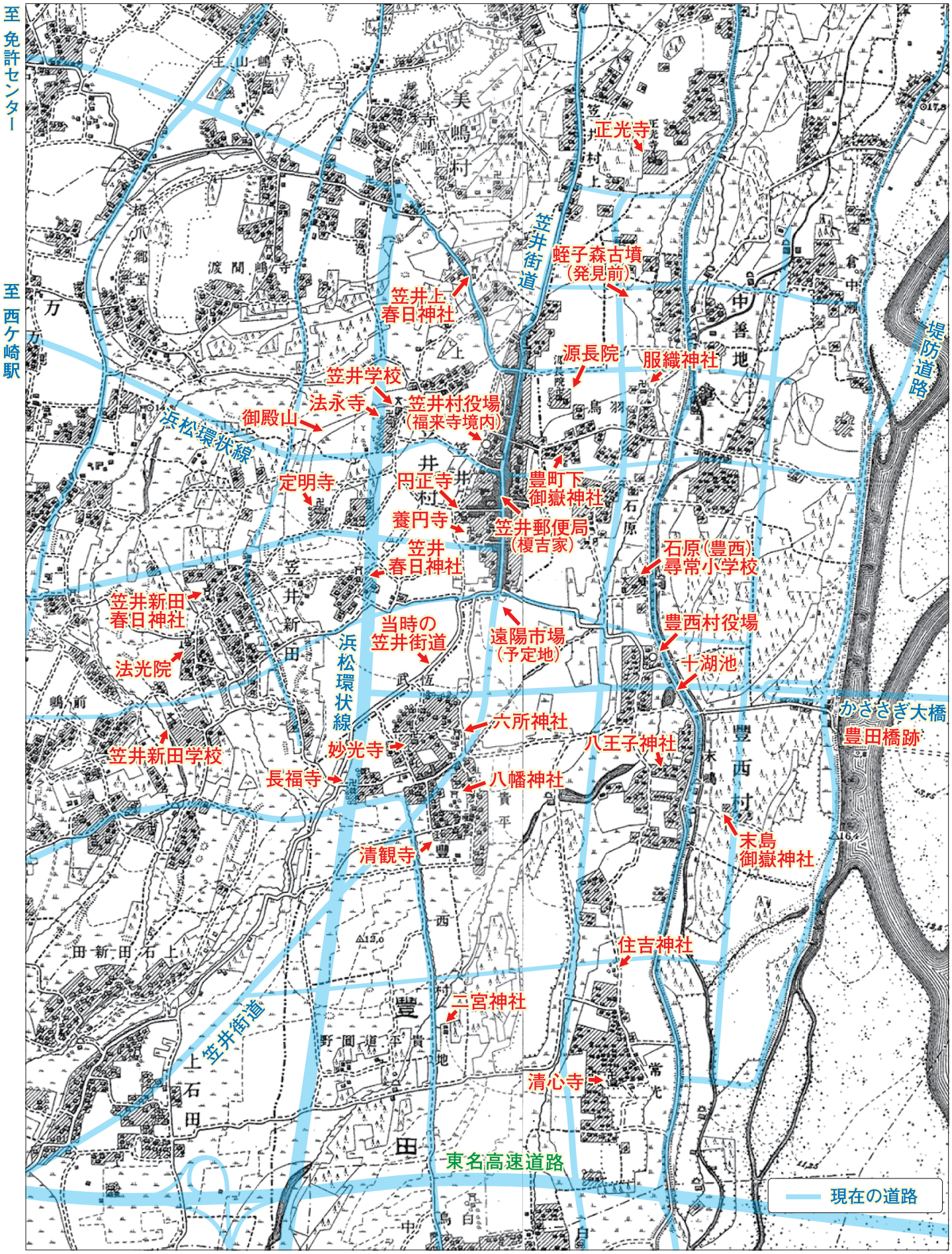
発行者　笠井報徳社
〒431-3107 静岡県浜松市東区笠井町1364番地
FAX 053-434-2908（理事長 山下智之 宛て）

校正、編集の協力（笠井報徳社社員）　山下智之、池田充義、村木千代八、田村滋治、小栗　寛、鈴木　廣、松島秀夫、黒澤龍司、大谷洋介

印刷・出版者　板垣彰一郎

明治23年の笠井地区

（郵便局の地図記号〒が福来寺境内に描かれていますが、実際は榎吉家敷地内にありました）



この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップon the web」より作成したものです。